読者参加G(ゲーム)ノベル



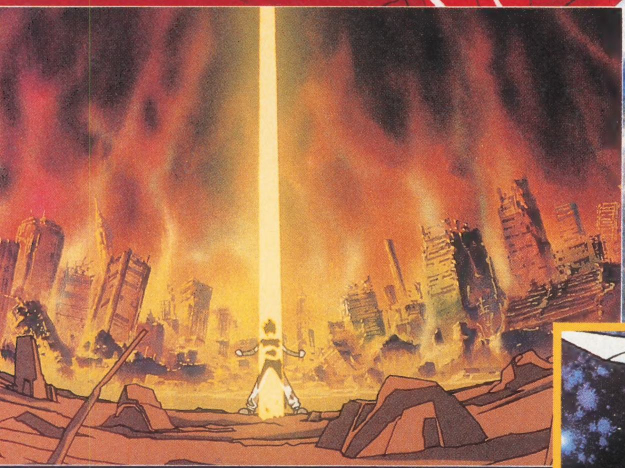

爆れつハンター
Special
第6話
恐怖のフォークダンス
あかほりさとる
イラスト／臣士れい



大御礼 TVアニメ 大好評!!

さすがは実力スタッフ陣って感じで、好評の声の高い「爆れつハンター」のTVアニメ。もちろん電撃PCエンジンの読者は毎週欠かさずチェックしているよね。今月は、ちょこっと雰囲気が変わって新しい魅力を持ったキャロットの、オープニングのフィルムを誌上リプレイ。この号の出る頃には、キャロットの変身シーンも放送されているだろうから、ますますキャロットが好きになった人も多いんじゃないかな（放送のない地域の人はこのフィルムでガマンしてね…ゴメン）。

さて、ここで編集部からのお詫びをひとつ。前月号で紹介したキャラ設定で、ティラと紹介した写真は実はショコラのものでした。勘違いされてしまった皆さん、本当にごめんなさい。









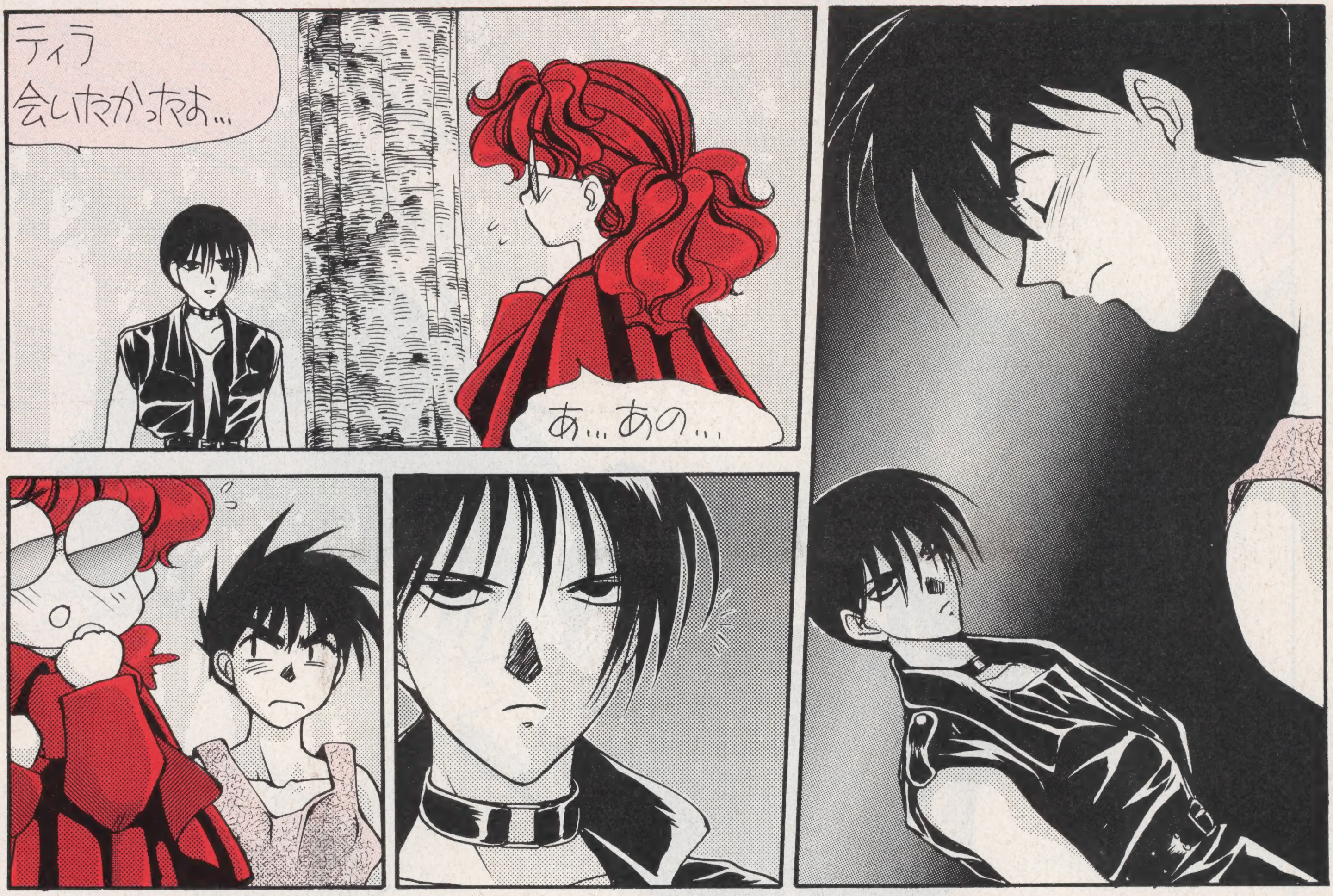
やっと主役の脚光が!?
がんばれキャロット!!

キャロット役 古本さんのラジオスタート

爆れつの主人公、キャロット役を演じる古本新之輔さんがパーソナリティを務めるラジオ番組「古本新之輔のパラシュート遊激隊」が、文化放送で、10月14日よりスタートしたぞ。声優、俳優、ミュージシャンと、マルチな古本さんらしく、話題豊富で楽しい会話が満載の番組だ。



古本さんいわく、「絶対損はさせない!!　楽しいからぜひ聴いて！」というこの番組は、10月～11月のゲストアシスタントに白鳥由里さんを迎えて、毎週土曜・午後10時30分より絶賛放送中。

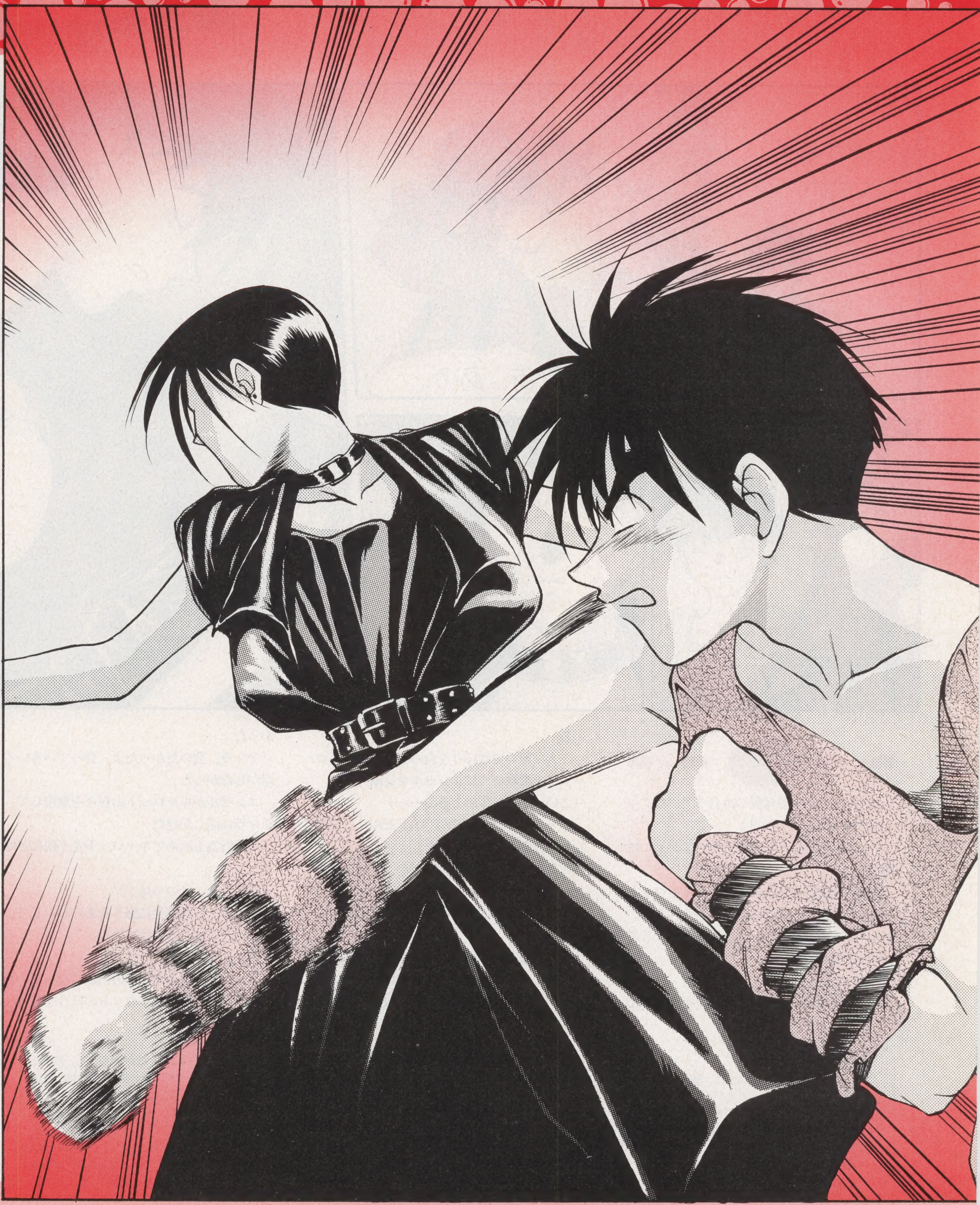


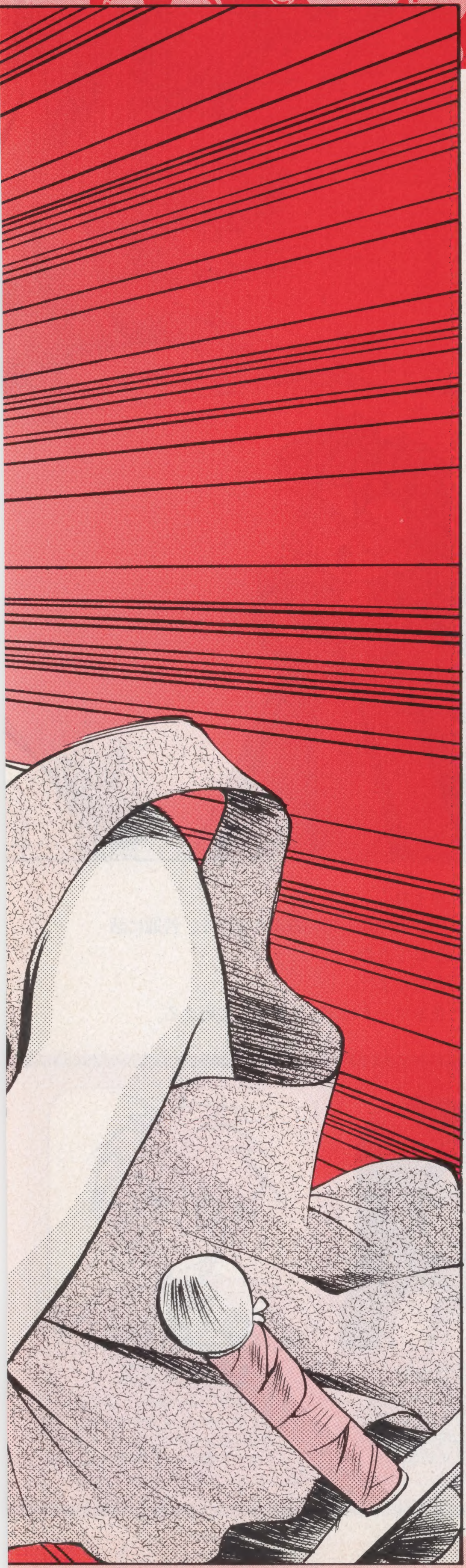
1

エンゼルとティラは見つめ合っていた。
（エンゼルがなぜ……？）
ティラは困惑したような表情をエンゼルに向ける。
困惑の原因はもちろん横にいるキャロットにあった。ただ、だからこそというべきか、キャロットのほうにティラは視線を向けることができなかった。
「…………」
エンゼルのほうはじっとティラを見つめている。
二人に置いてきぼりを食った格好のキャロットは不機嫌そうにエンゼルを見据えた。
（こいつがプールのときの……）
キャロットはティラが「エンゼル」と口にしたのを聞き逃さなかった。
（エンゼルだか、ヘンゼルだか、グレーテルだか知らないが、なんかむかつく！）
キャロットの心はだんだん怒りで充満していく。
それがなんの感情なのか、キャロット自身はもちろん思い当たるはずもない。
だがそれは、世間ではごく一般的な感情であった。
「ティラ、会いたかったよ。会っていろいろ話がしたかった」
エンゼルがキャロットの存在を無視して、ティラに話しかけた。
その行為も極めてキャロットを不快にさせた。
（なんだよ、こいつは！）
キャロットは完全に怒りをあらわにして、エンゼルをにらみつけていた。
「あ、あの……」
ティラはしどろもどろの口調になっていた。
チラッチラッとキャロットのほうを見る。

前回までのあらすじ

ここ、スプゥールナ大陸では、魔法を使える一握りの法族（ソーサラー）たちが、大勢の庶民（パーソナー）に対し、支配する側として君臨していた。
庶民に対する法族の圧制は過酷を極めたが、力を持たぬ庶民はただ黙って涙するしかなかった。が、そんな人々にもたった一つ、光明が――
それは天に代わって、非道な法族を始末する謎の仕事人たちの存在であった。人は彼らをこう呼んだ。法族狩り（ソーサラーハンター）と。
てなマジメ（笑）な物語は電撃文庫の本編におまかせして、法族狩りの元締めビッグマムの命により、ファミル帝国の小悪党にもお灸を据えるようになったキャロットたちは、フィッシュ一族の率いるおとぼけ怪人たちと戦うことになる。大爆笑の中、毎回怪人を倒し続けるキャロットたち。ところがある日、ティラの前にエンゼルという若者が現れる。泥棒の濡れ衣を着せてしまうという出会いの割には、急速に接近していく二人。が、エンゼルは実はフィッシュ一族の一人だったのだ。しかしエンゼル自身はフィッシュ一族から離れようとしており、またティラもエンゼルの身元には気づいていない…。なんとなく不愉快に過ごすキャロ。だが、なんとエンゼルがキャロとティラ二人の前に姿を現す！　はたして!?





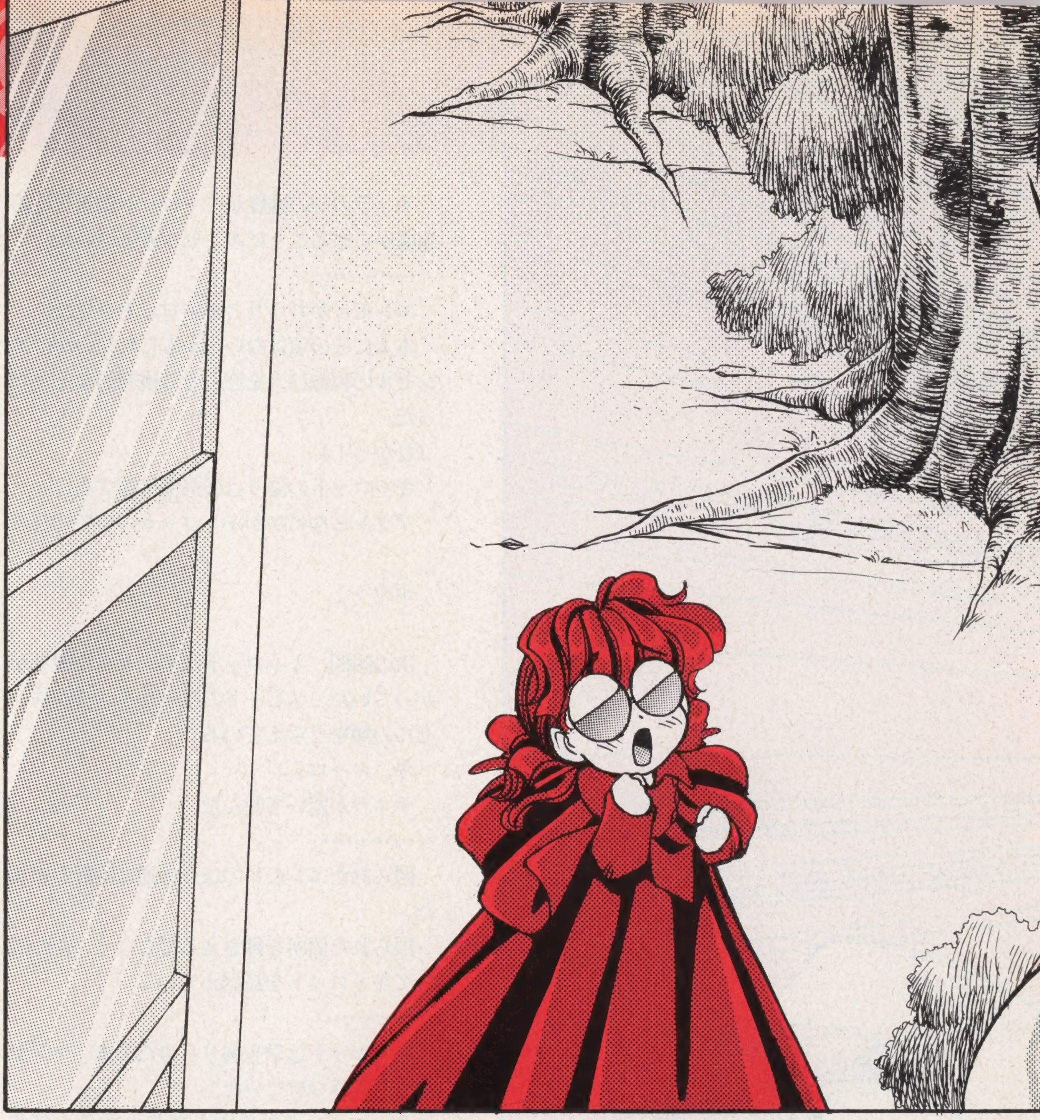
ティラのその態度がキャロットに対しての遠慮から来ることにエンゼルも気づいた。
「…………」
エンゼルがちらりとキャロットを見た。
本人にその気はないのかもしれないが、エンゼルの視線は人を怒らせる挑発的なそれだった。
（むかっ！）
キャロットの怒りは最高潮に達する。
プツンとなにかがキャロットの中で切れた。

ボカッ！

次の瞬間、キャロットはエンゼルに殴りかかっていた。スピードの乗ったパンチがエンゼルの頬をとらえている。
「キ、キャロ！」
ティラが驚いて叫んだ。
「…………」
殴られたエンゼルのほうは逆に冷静なままだ。
殴られた箇所を押さえるでもなく、ただ黙ってキャロットを見据えている。
「クッ……」
キャロットは拳を握りしめたまま、エンゼルをにらみつけていた。
「キャロ、いきなりなんてことするんですの！」
ティラが怒ったように言う。
が、キャロットは「ヘンッ！」とそっぽを向いてしまい、そのまま走り出した。
「キャロ！」
ティラの声もむなしく、やがてキャロットの姿は見えなくなった。
「あ、あの、大丈夫ですか、エンゼル？」
ティラがエンゼルに駆け寄って言った。
エンゼルは怒った様子もなく、キャロットの消えたほうを見つめている。
「別に……」
「すいません、すいません」
ティラが頭を下げた。
「今のは？」
「えっ、あ、キャロットと言いまして……お、幼なじみですの」
ティラは少し狼狽して言った。キャロットのことを説明するとき、一瞬、なんと答えていいのか迷ったのだ。
「…………」
「本当にごめんなさい」
「キミが謝ることじゃないさ」
「で、でも……」
キャロットの暴挙に対して、ティラはエンゼルにすまない気持ちでいっぱいだった。
だが、そんな気持ちに相反して、心の奥底でただ一つだけうれしく思うことがあった。
（キャロ……嫉妬してくれたのかなぁ……）
ともすれば、顔に出そうになるその気持ちをティラは必死におさえた。
「…………」
そんなティラの心の動きがわかったのか、エンゼルは醒めたような表情でティラを見た。
「今日は帰るよ」
エンゼルはポツリと言うと、ティラの返事を待つでもなく、歩き出した。
「あ、エンゼル……」
ティラが慌てて声をかけるが、エンゼルは振り向かない。
「ごめんなさい、エンゼル」
去っていくエンゼルに対して、ティラは深深と頭を下げ続けた。

2

キャロットは部屋に閉じこもったまま、外に出ようとしなかった。
マロンは心配しながらもキャロットに話しかけようとはしない。なんとなく話しかけられない雰囲気があったのだ。
「…………」
ベッドに寝転がったまま、キャロットは天井を見つめていた。
（ったく、なに腹立ててんだ、オレは……）
少しばかり自己嫌悪に駆られる。
エンゼルを殴ったときは完全に頭に血が昇った状態で、自分でもよくわからないまま、気がついたら手が出ていたのだ。
（なんであんなに頭に来たんだろうな……）
風体や雰囲気にいちいち腹を立てるキャロットではない。
エンゼルが自分のことを無視したといっても、いわばまったく見知らぬ人間だから、それもあたりまえだ。
結局、キャロットが腹を立てたのはすべてティラの態度にあった。
「なあ、マロン」
突然、キャロットがマロンに話しかけた。



「なに、兄さん？」
　マロンはまるで待っていたかのように自然に応える。
「オレって短気か？」
「うん」
「オレって自分勝手か？」
「うん」
「オレってケツの穴の小さい人間だと思うか」
「そう思うよ」
　容赦のないマロンの返答だった。
　決して慰めたり、持ち上げたりしない。
　しかし、キャロットにはそのほうが心地よかった。
　マロンにしても、キャロットにはこういう返答が一番いいことを知っていたのだ。二人は実にお互いのことをわかり合った兄弟だった。
「ったく、おまえは口が悪いな！」
「兄さんの弟だからね」
「けっ！」
　キャロットはベッドから起き上がると叫んだ。
「マロン、飯だ、飯！　腹減った！」
「はい、はい」
　マロンが台所に向かい夕食の準備を始める。
　キャロットは食卓に向かうと、あーしろこーしろと注文ばかりつけ出した。
　いつもの夕食前の風景だ。
　ふと、キャロットはすっかり暗くなった窓の外を見た。
　キャロットたちの部屋は二階にある。
「ん!?」
　眼下に赤い服が見えた。
「ティラ!?」
　窓を開けて、改めて見ると、それはやはりティラだった。
「キャロ！」
　ティラは怒っているふうもなく、普通に話しかけてきた。
「なんだよ!?」
　キャロットはぶっきらぼうに応える。

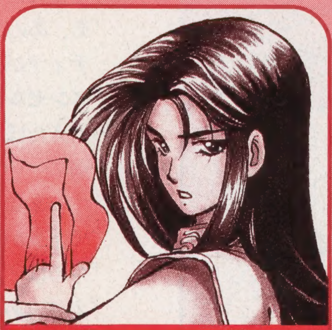
ハンターリスト



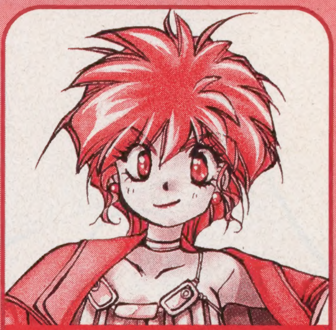
キャロット=グラッセ
爆れつハンターのリーダーながら、その性格はご存じの通りスケベでノー天気で超お調子者。魔法を受けると牛魔獣など獣人化する。



ティラ=ミス
慈愛に満ちた眼差しが、封印を解かれたとたん、恐怖のSM女王の眼光に変わる。キャロットに密かに恋心を持っている。

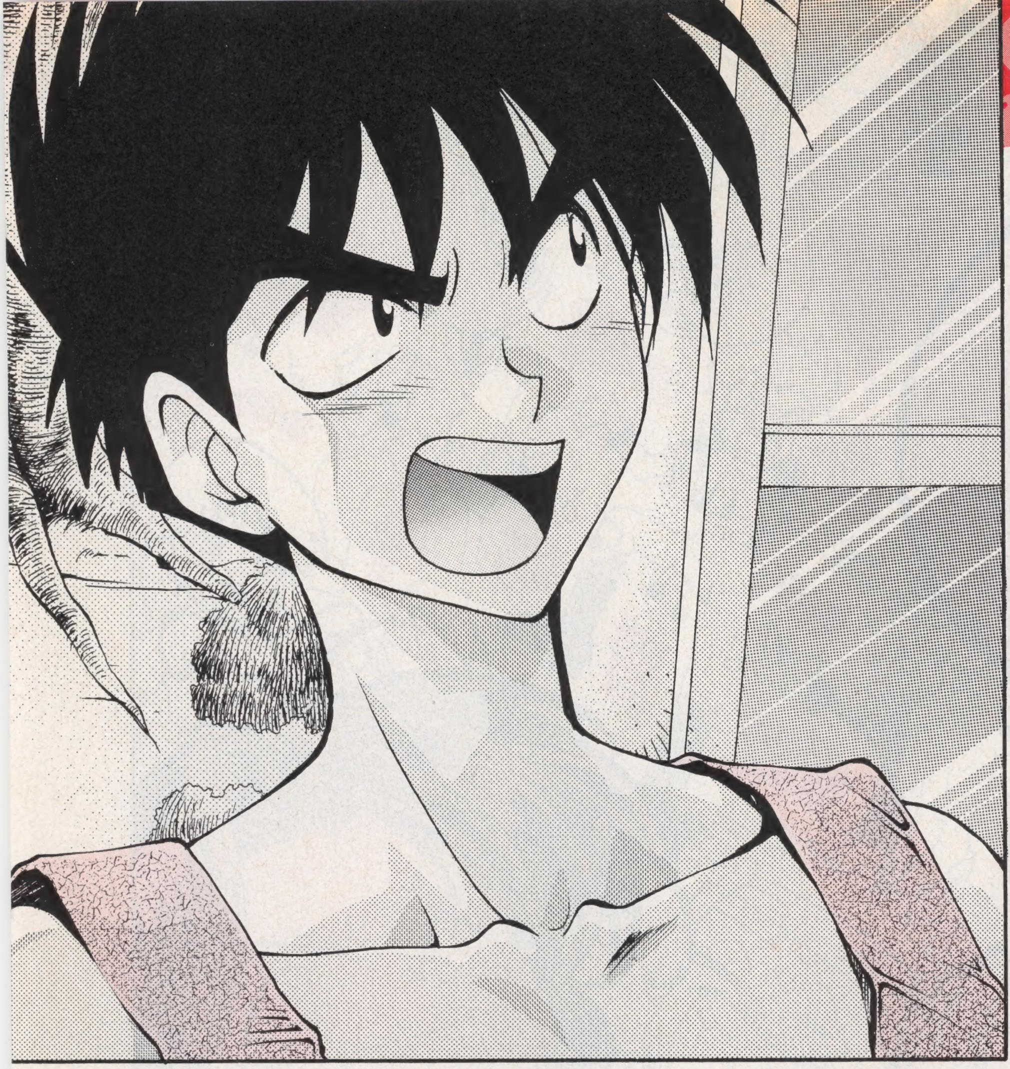


マロン=グラッセ
東方魔術の達人にして冷静沈着、兄のキャロットとは正反対の性格である。だが、実は強度のブラザーコンプレックスでもある。

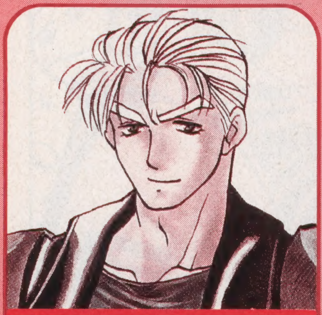


ショコラ=ミス
好きな男には一直線！　妹のティラとはこちらも正反対の性格。しかしSM女王様化した後の怖さは、まさに姉妹！　の恐ろしさ。

爆れつ場外乱暴!!
今月はまず、お知らせから始めるぞ！　皆さんお待ちかねの（頼む、お待ちかねしていてくれよ～）、この「爆れつハンターSPECIAL」の文庫化がついに決定しました!!　発売は、来年早々の1月27日を予定。当然本誌の連載と同じく、臣士さんの挿し絵満載で行く予定だ。（次ページへ続く）



「あのですねぇ」
「だからなんだ!?」
「さっきの人はエンゼルさんと言いまして、この間ひょんなことで出逢った見習いのファッションデザイナーさんですの」



ガトー=モカ

美に対する執着は、まさに病的。おのが肉体にもそれを求め、結果的に、物理攻撃としては究極の肉体を手に入れた法族狩り。

「あっそ。で……!?」
「別に……それだけですわ」
「いちいちそんなこと言いに来なくていいわい！」
キャロットは大きくアカンベーをすると、背後に向かって元気よく叫んだ。
「マロン、飯だ！　飯！　ティラも食うってよ！」
「えっ!?」
「そうだな、ティラ！」
一瞬、真面目な表情でキャロットはティラを見る。
ティラとキャロットの視線が合った。
「あ……」
「…………」
キャロットの目を見たまま、ティラは大きくうなずいていた。
「ええ……はい」
「よし、じゃあさっさと上がってこいよ！」
キャロットはそれだけ言うと奥へ引っ込んだ。
その窓をしばらく見つめて、ティラは笑顔で歩き出した。

3

帝都ファザードにはなんの変哲もない普通の日が訪れていた。
日々の糧を求めて、人々は額に汗して働いている。
働くということは尊いが、時にはつらい。
そんなとき、音楽などがあれば心が和んだりする。かくして、街角の楽士が意外と重宝されたりしているのだ。
最初、その五人もそんな楽士のグループに見えた。
五人ともおそろいの服を着ている。少年が三人、少女が二人。歳のころは一二、三といったところか。
おや!?　と思われたのは、五人とも額に逆三角紋様があることだった。法族の楽士、しかもこんな少年少女というのは珍しい。
五人はニコニコ笑いながら踊り出した。
「あはは！」
彼らが踊ると楽器もないのに音楽が鳴る。それが彼らの魔法だった。

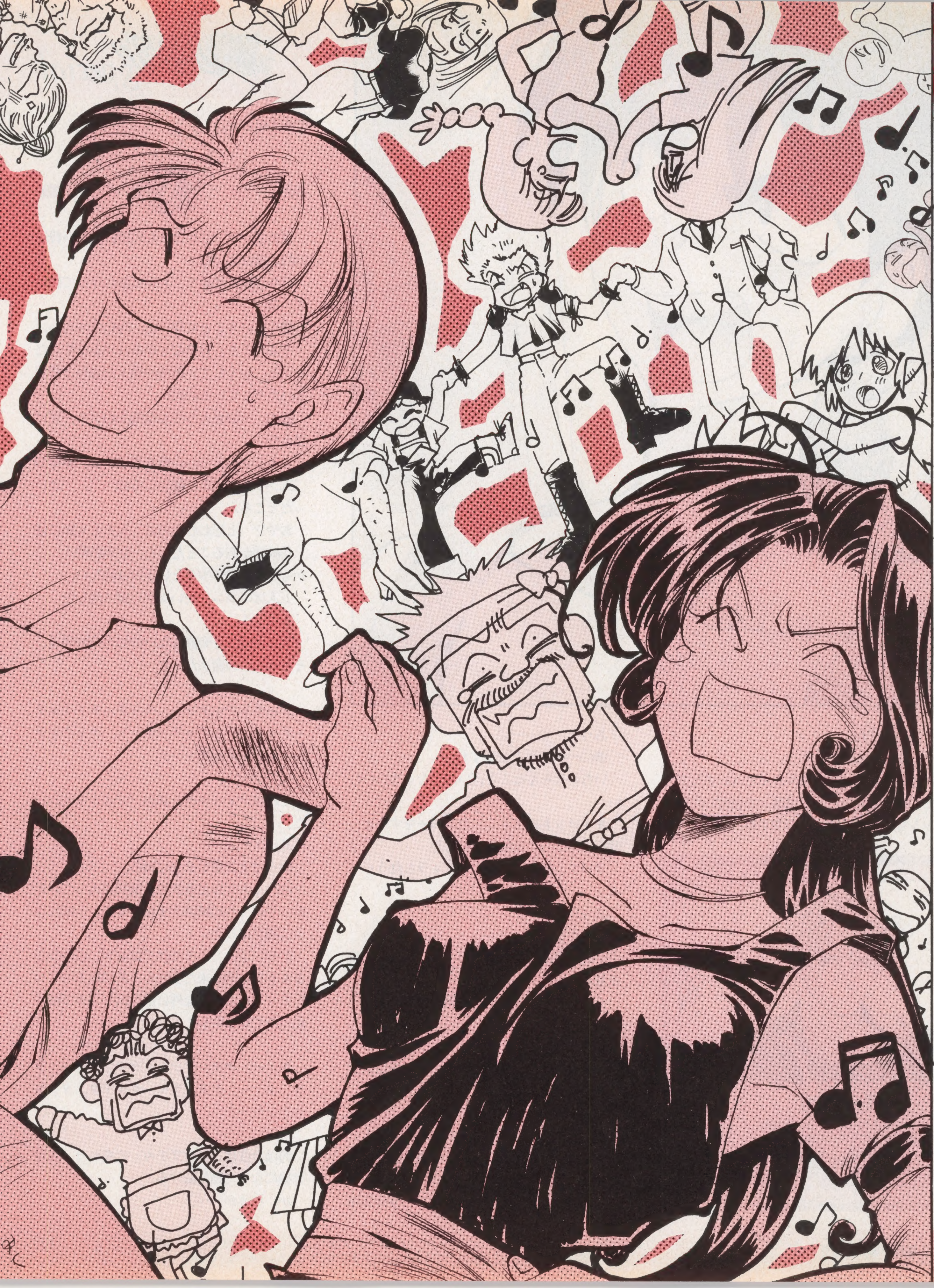
チャチャチャチャ〜、チャチャチャチャチャチャ〜、チャチャチャチャ〜、チャチャチャチャチャチャ〜♪

それはフォークダンスの『マイムマイム』だ。
「あは！」
彼らは実に楽しそうに踊る。
道行く人々は足を止め、最初見入っていたが、そのうちに隣同士手をつなぎ、一緒になって踊り出した。
いや、道行く人々だけではない。店のおじさんも買い物に来た主婦も、茶店に入っていたカップルもみんな外に飛び出してきて踊り出したではないか！

タァー、タタ、タァー、タタ、タァー、タタ、タァー、タタ、タァータタタタ、タッタッタァー〜♪

曲は今度は『コロブチカ』に変わり、人々は輪になって踊り続ける。
「か、身体が……」

（前ページから続いて）もちろん、文庫化にともなって新章を書き足すし、お楽しみの臣士さんのカラー口絵や、座談会、用字用語辞典など、「爆れつハンター SPECIAL」ならではの演出で、お楽しみ本の要素も搭載予定だ。もう一つの「爆れつハンター」。発売をもうちょっと待っててね。



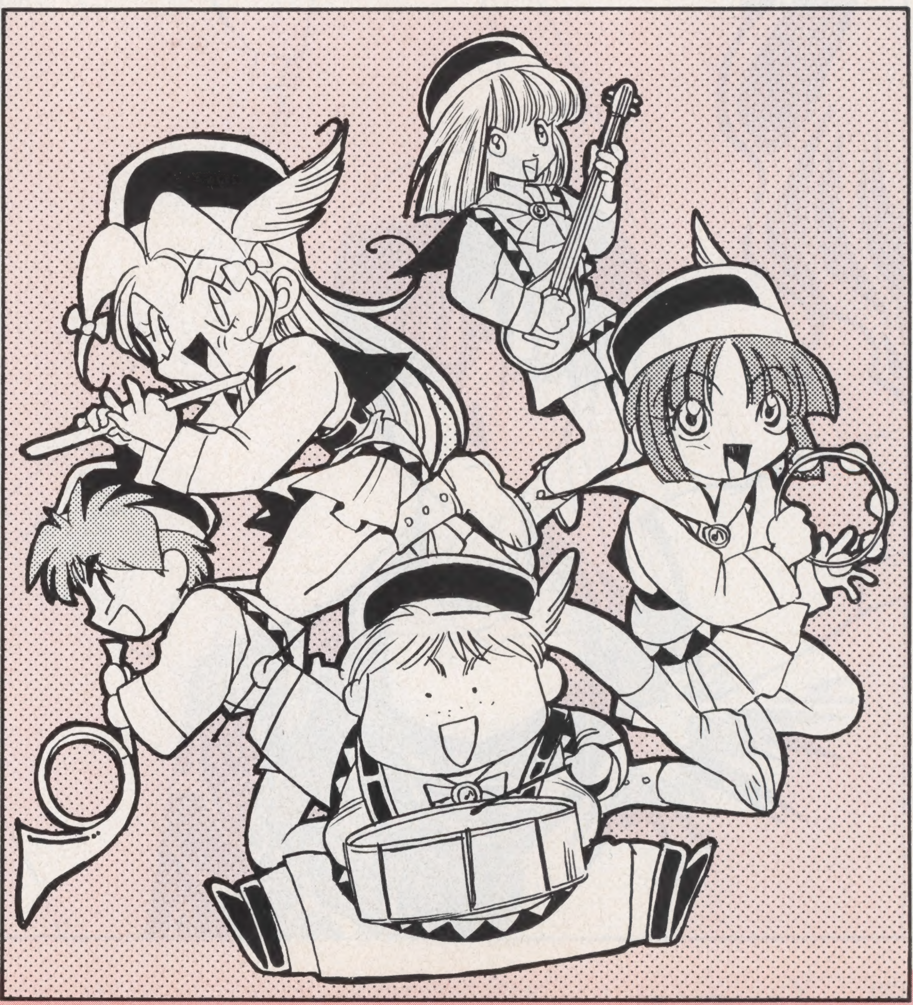
「止まらない！」
どうやら意に反して身体が勝手に動いているようだった。

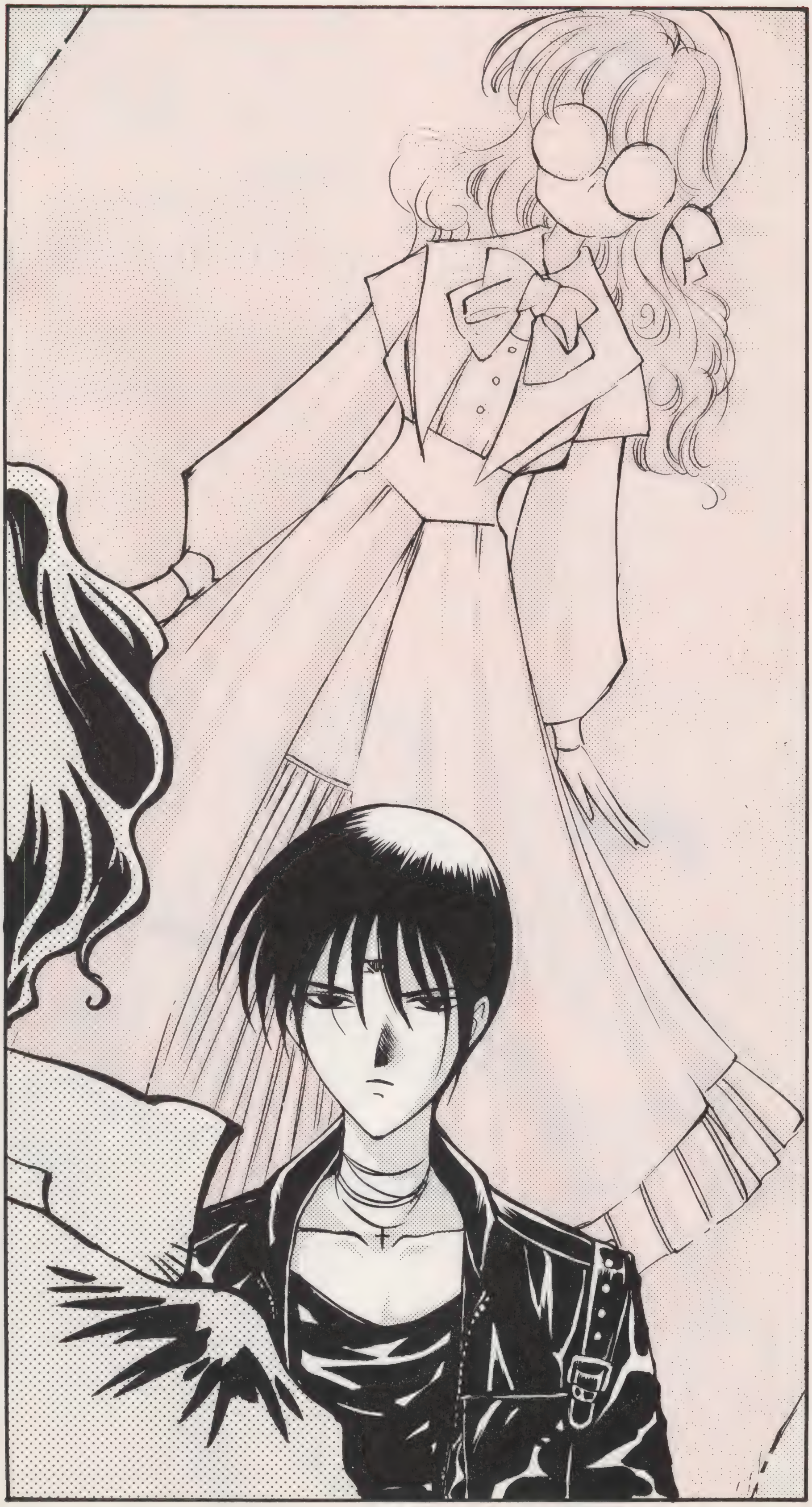
ティラ、ティラティララ、ティラ、ティラティララ、ティラティティティティラ、ティティララ〜♪

続いては『オクラホマミキサー』だ。
「うわーっ、もうやめさせてくれっ！」
「だれか止めて〜！」
「助けて〜！」
泣き叫びながら踊り続ける人々を五人の少年少女はクスクス笑いながら見ていた。
「よくやりましたわ」
少年少女の後ろから高ピーな声が響く。
現れたのはケバい化粧ネーチャン、オータム・フィッシュだ。
けれど、オータムに対しては彼らはプイッと横を向いた。
「オバサンなんて知らない」
「だれがオバサンじゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
オータムは激昂するが、彼らはまるで意に介さなかった。
「えへへ、みんなすっごぉい！」
あどけない笑みを浮かべたソード・フィッシュがひょこっとオータムの横に現れる。
「あ、ソードちゃんだ！」
「ソードちゃん！」
「結構おもしろかったよ！」
「これでよかったの？」
「楽しかった！」
どうやら五人はソードの友だちらしかった。
オータムが必死に怒りをこらえて、震える声で言う。
「ソ、ソード、あなたのお友だちに口のきき方を教えておあげなさいな」
「みんな、なんかお姉様、怒ってるみたいだから謝ってあげてよ」
五人はソードに言われ、オータムのほうに向き直るとあっけらかんとした表情で言った。
「ごめんなさい、オバチャン」
「うきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
血管が切れそうなソードの怒りの声が響き渡った。

4

「マイムです」
「オクラホマです」
「コロブチカです」
「ジェンカよ」
「イエローリボンで〜す」
五人はフィレオ・フィッシュ公爵の前に並んでいた。
「五人そろって……フォークダンサー５」
ビシッと五人がポーズをとった。
しかし、どう見ても子供たちが遊んでいるとしか思えない。
「すばらしい！」
公爵は思わず拍手した。
横にいたソードがニコニコ顔で言う。
「みんな、ソードちゃんのお友だちなの」
「うむ、ソード、期待しておるぞ！」
オータムがソードを押しのけるように前に出て言った。
「彼らフォークダンサー５の魔法を浴びた者は、彼らが術を解くまで、永遠に踊り続けることになりますわ！　帝都の人間たちをすべて踊らせてしまえば、帝都を制圧することなどたやすいこと！　その上でそれを第一歩とし、世界征服を……」
「オバサンの言うことは聞かないよ」
フォークダンサー５の一人、マイムがそう言うと、またもオータムはヒステリックに爆発した。
「うきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
フォークダンサー５の五人はそれをおもしろがっている。
「きゃっ！　おもしろい！」
「オバサン！　オバサン！」
「うきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
フォークダンサー５にソードも混ざった六人の悪ガキにすっかりオモチャにされているオータムだった。





5

「ほう、なかなかいいじゃないか」

講師はただでさえ細い目をさらに細めてエンゼルのデザイン画に見入っていた。

デザイン学校での、いつもとあまり変わらぬ課題の提出……のはずだった。

が、そこで小さな異変が起こった。

いつもあまり人をほめることのない講師が提出されたデザイン画を見て、好意的な感想を述べたのだ。

しかも、それも学校では問題児と言われ、孤立しているエンゼルというところが生徒たちの関心を引いた。

「…………」

ほめられてもエンゼルはあまり表情を変えない。

ただ、その講師のほうもエンゼルの態度には大して興味ないらしく、まるで気にしていなかった。

エンゼルの提出したのは少女の服だった。

「今までのおまえの考えてきた服は、どれもこれも決して人が着たいとは思わないような服だったが、これはそうじゃないな」

辛辣(しんらつ)な言い方でもエンゼルの表情は変わらなかった。

「だれかに着せたくなったか、自分のデザインした服を!?」

講師はニヤニヤしながら言った。

それに対し、エンゼルはペコリと頭を下げた。

「ありがとうございました」

教室の中が思わずどよめきに満たされる。

「おい、あのエンゼルが！」

「ありがとうだってさ！」

「あいつが……！」

視線を一身に浴びながら自分の席に戻っていくエンゼルを講師はしばらく見つめていた。

講師はエンゼルの提出したデザイン画に再び目を落とした。

そのデザイン画の服を着た少女はなぜか丸い眼鏡をかけていた。

爆れつ場外乱暴!! すわぁて、編集部からぶち込まれたコマーシャルは終わりにして、ぼちぼち天下のダジャレコーナーをスタートしよう。今月の１枚目は初掲載、埼玉県キョロ三郎クンの作品から「"こたつでチ×コたつ" 今年の冬は寒くなりそうだ」…お前いきなりこれかー。そりゃ寒いだろうよ。（次ページへまたまた続く）

6

涙の向こうは肉の壁〜、男は黙って筋肉見せりゃ〜、あぁぁ〜、二人男の兄貴橋〜♪

強烈な歌がガトーの部屋から響いてくる。
「はぁ……」
マロンはうんざりした表情で向かっていた足を止め、踵を返して去ろうとした。
「おう、マロン、なんだよ、つれないな！」
目ざとくガトーが見つけて、マロンに声をかける。
しかたなくマロンは振り向いた。
「ガトー、マムがお呼びです。どうやら仕事のようですよ」
「なんだよ、またフィッシュ一族じゃねえだろうな！」
「たぶん……そうでしょう」
「ちっ！　……ところで、マロン、今のオレの歌、どうだった!?」
「あれは歌なんですか……？」
「おうとも！　おまえ、東方魔術の使い手のくせに知らねえのか!?　あれこそ、東方に代代伝わる永遠の名曲〝演歌〟よ！」
「はぁ……」
「心を震わせる東方の神秘！　泣けるぜ！」
「はぁ……」
「今、帝都でちょっとしたブームなんだぜ。なんだったら、オレの美声、ちょっと聞かせてやろうか！」
「いいですから、急ぎましょう！」
マロンは身震いして、足を速めた。



WANTED！

フィレオ＝フィッシュ



悪の法族「フィッシュ一族」の総帥。制服マニアが高じて世界征服までもくろむおマヌケなオヤジ。正体、実力のほどはまだ不明。

オータム＝フィッシュ



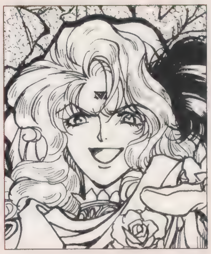
フィッシュ一族の長女。ケバケバな容姿と酷薄な性格はまさに悪の女帝。異母兄のゼリーと、一族の後継者をめぐって対立している。

ソード＝フィッシュ



オータムの実妹。コケティッシュな容姿通り小悪魔的な性格。ニコニコとあまり意味もわからないままに、悪の野望の手伝いをする。

ゼリー＝フィッシュ



フィッシュ一族の長男。一見オカマ的だが、性格もやっぱり陰険、自分勝手、無責任と三拍子そろった悪役。おマヌケさも父親ゆずり。

エンゼル＝フィッシュ



フィッシュ一族の一員ながら兄妹とは一線を画し、ゼリー、オータムとも仲が悪い。その過去、人柄は今のところ謎に包まれている。

爆れつ場外乱暴!!　(前ページより)ところが同じネタがもう一本届いているんだよな。千葉県のちん２かも２のかつクンがそれ。「冬の夜、こたつの中でアソコ勃つ…お茶目な奴め」……このコーナーの投稿者っていったい…。まあ、こっちの方は俳句の形になってるけどなぁ。二人ともオレみたいにならないうちに改心せよ(笑)。

7

チャチャチャチャ〜、チャチャチャチャチャチャチャ〜、チャチャチャチャ〜、チャチャチャチャチャチャチャ〜♪

『マイムマイム』の音楽が街中に響き渡る。
人々は踊りまくっていた。
「わー、だれか止めてくれ！」
「手が！」
「足が！」
「腰が！」
「勝手に動くぅ〜！」
人々の真ん中にいるのはフォークダンス5の五人とオータムとソードだった。
オータムが勝ち誇ったように叫ぶ。
「おーっほほほほほっ！　踊りなさい！　踊りなさい！　踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損損！」
「オバサン」
「うきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
すでに踊る人間の数は万を超えていただろう。
なおもフォークダンスの輪はどんどん大きくなっていく。

チン、チン、チッチチッチチン〜、チン、チン、チッチチッチチン〜♪

音楽が『ジェンカ』に変わった。
数万人が一列につながって、いっせいに飛び跳ねる。
大地は大きく揺らいだ。
たかがフォークダンスというなかれ、ここまで来ると凄まじい威力があるのだ。
このままでは帝都ファザードはフォークダンスによって滅びる。
後世の歴史家が聞いたら卒倒したくなるような理由を阻止したのは、やはりこの面々だった。

チャラッチャチャチャチャチャ〜！

テーマ音楽が響く。
「爆れつファイヤー参上！」
マスクをつけた五人の戦士たちが通りを見下ろす屋根の上に立っていた。
正義の味方の登場だ！
「やいやいやい！　帝都を狙うフィッシュ一族、この爆れつファイヤーが来たからには、もう好きにはさせないぜ！」
先頭のキャロットがさっそうと叫んだ。
それを受けて立ったのはオータムだ。
「来たわね、爆れつファイヤー！　フォークダンサー5、やっておしまいなさい！」
「やだ。オバサンの言うことは聞かない」
「うきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃいいっ！　あんたらねぇ！　ソード、あんたもなんとか言いなさいよ！」
「なんとか！」
「うきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
「なにやってんだ、あいつら!?」
ほとんど漫才と化しているオータムとソードとフォークダンサー5のやりとりをあきれた表情で見ていたキャロットたちだったが、そうしていられたのもわずかな時間だった。

タァー、タタ、タァー、タタ、タァー、タタ、タァー、タタ、タァータタタタ、タッタッタァー〜♪

いつの間にか音楽は『コロブチカ』に変わっている。
「ん!?」
そのとき、身体が勝手に動き出しているのにキャロットは気づいた。
「なんだぁ!?」
キャロットだけではない。ティラも、ショコラも、ガトーも、そしてマロンまで。
「なんなの!?」
「身体が……！」
「こいつは！」
「しまった！」
キャロットたちは知らず知らずのうちに踊りの輪の中に入っていた。
「くそっ！　耳をふさいでもだめだ！」
どうやらフォークダンス5の魔法の音楽は直接脳に響いてくるらしい。耳をふさいだり、耳栓をしたりしても無駄なのだ。
「くっ！」
マロンたちが踊り地獄から逃れようとして悪戦苦闘している間、キャロットはもっと深刻な事態に直面していた。
「わーっ、オレの相手、男じゃねえか！」
……いるんだよねぇ。運動会のフォークダンスで女の子の数が足りないから男と組まされちゃうヤツ。
まさにキャロットはその状態だった。
しかも、相手はむさくるしい髭(ひげ)ボーボーのオッサン……。
「兄さん、今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ！」
「うるせぇ！　男と踊らなきゃならないオレの気持ちがわかるか！」
だが、フォークダンスの場合、パートナーは次々と変わる。
わずかな辛抱だぞ、キャロット！　……と思ったら——

チャチャチャチャ〜、チャチャチャチャチャチャチャ〜、チャチャチャチャ〜、チャチャチャチャチャチャチャ〜♪

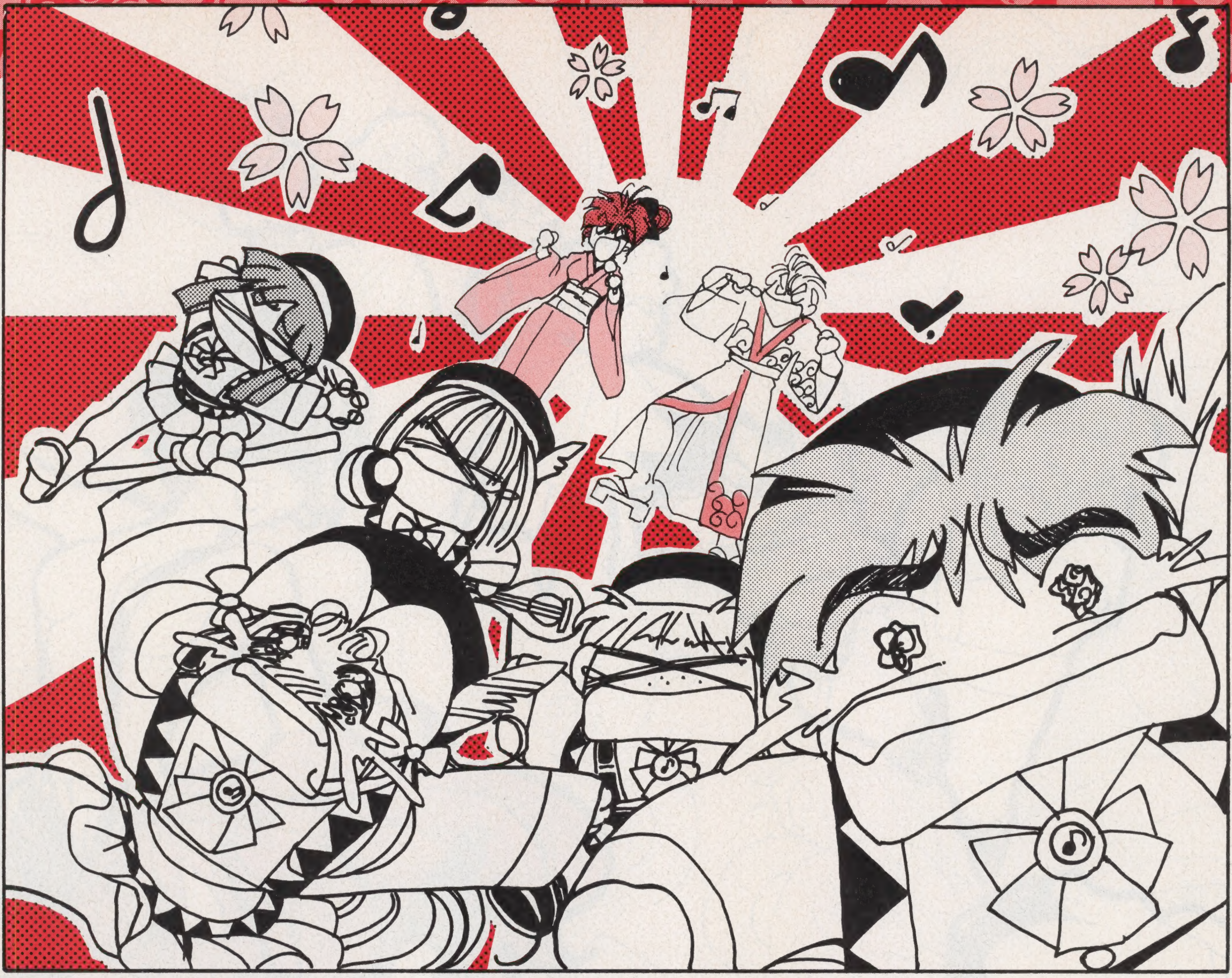
音楽がまた『マイムマイム』に戻った。
「しまった！　『マイムマイム』の場合はパートナーが変わらないんだ！」
哀れ、キャロットの相手はずっとむさくるしいオッサンに……。
「ホホホホ……爆れつファイヤーもフォークダンスをしていればかわいいもの！　さあ、フォークダンサー5、もっと曲を激しくして、やつらを衰弱させるのよ！」
「だから、オバサンの指図は受けないってば」
「うきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」
しかし、事態はオータムの思い通りになっていた。
爆れつファイヤーの面々はともかく、普通の人間のほうの体力は限界に来ている。たとえ疲れて寝てしまっても身体は動いてしまうのだ。
踊り疲れて大量の衰弱死というのも絵空事ではない！
「いけない、このままじゃ！」
深刻な表情でマロンが言った。ただ『マイムマイム』を踊っているため、今一つ緊張感がないといえばない。
やはり『マイムマイム』を踊りながらガトーが叫んだ。
「音楽には音楽を！　オレにまかせろ！」

バサッ！

ガトーが上着を脱ぎ捨てた。

《爆れつ場外乱暴!!》気を取り直して次、埼玉県・ハットリクンの作品。「ハト特集〝ハトを波止場でハッとばす〟〝ハトのハートにハッとする〟」…寒い〜、寒すぎる〜。まあ、初物ということで大甘掲載ってとこだな〜。はっきり言うけど両作品とも同じダジャレでしかないぞ!!　次に向けて精進するようにな（笑）。》





なんとその下に着ていたのは「筋肉一代」と書かれた着流し！
いったいいつの間にこんなもん用意したんだ!?
「行くぜ、一〇〇万枚！　オレの『筋肉兄貴橋』を聞け〜っ！」

筋肉燃やして汗越えて〜、涙の向こうは肉の壁〜、男は黙って筋肉見せりゃ〜、あぁぁ〜、二人男の兄貴橋〜♪

ガトーの〝演歌〟は思った以上の効果を上げた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
いきなりフォークダンサー５の五人が苦しみ出したのだ。
五人にとって演歌は心を震わせる音楽などではなく、自分たちのリズムとまったく相反する悪魔の音楽であった。
フォークダンスの音楽がピタッと止まる。
「なるほど、〝演歌〟ね……」
ショコラがつぶやく。
いきなりショコラの服が宙に舞った。
スッポンポン……ではなく、なんと、振り袖姿でマイクを持ってショコラは立っていた。
どうしてあのサスペンダーを脱いだらこうなるかは考えないように。
「うふふ、演歌だったらあたしだって負けちゃいられないわ！　二番、ショコラ、『女の爛漫』！」

女を演じて一七年〜、乳とおしりは一級品〜、心はまだまだ青つぼみ〜、やがてくるくる女爛漫花盛り〜！

こぶしのきいたショコラの歌声が響く。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　もうこんなのや〜めた！」
フォークダンサー５の五人は一目散に逃げ出した。
「あ、ソードちゃんも行く！」
ソードもあとに続く。
「あ、あたしも！」
オータムも逃げ出そうとしたとき、フォークダンサー５の一人に足を引っかけられた。

ドテッ！

「きゃあ！」
地面に思いっきりつんのめる。
そこに踊りから解放された人々が殺到した。
「こら〜、待て〜！」
「ぐぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
人々に踏まれ、オータムはしばらく再起不能になってしまったとか。今回、けっこうズタボロの扱いなのであった。

《爆れつ場外乱暴!!　さて、お次は個人的に寒い作品。茨城県・ヘソ血のウッキー白井君、「あかほりさとる・劇場爆れつハンター＝あかほりさとる激怒?'バカですあんたー'BY奥様みゆきさん」　オイオイ頼むぜホント。まるでそのまんまやんかって違〜う!!　ダジャレどころかシャレに何なくって…おもしれーぞ〜(笑)。》

8

事件もすっかり片づいて、キャロットたちも宿舎に帰ってきた。

ショコラ、マロン、ガトーはそれぞれ用事があるとかで、またもキャロットとティラは二人きりになってしまう。

「…………」

別になにも話をせず、二人は歩いていた。

「ん!?」

宿舎に入ろうとして、二人の足が止まる。

宿舎の前にだれかが立っていたのだ。

特徴的な黒い服――

「おまえは……！」

「エンゼル！」

キャロットとティラはほぼ同時に叫んでいた。

「…………」

エンゼルは二人の姿を認めるとゆっくり近づいてきた。

キャロットのほうに鋭い視線を向ける。

「なんだよ!?」

キャロットもエンゼルのほうをにらんだときだった。

「……！」

一気にエンゼルが動いた。

ドゴォォォォッ！

「うがっ！」

エンゼルの切れのいいパンチがキャロットの頬に入ったのだ。

キャロットは大きく地面に叩きつけられていた。

「キ、キャロ！」

ティラが慌ててキャロットに駆け寄ろうとする。

そのティラを制して、エンゼルはキャロットに言った。

「これはオレからの宣戦布告だ」

「なぬ!?」

「オレはティラが好きだ！　こいつはオレがもらう！」

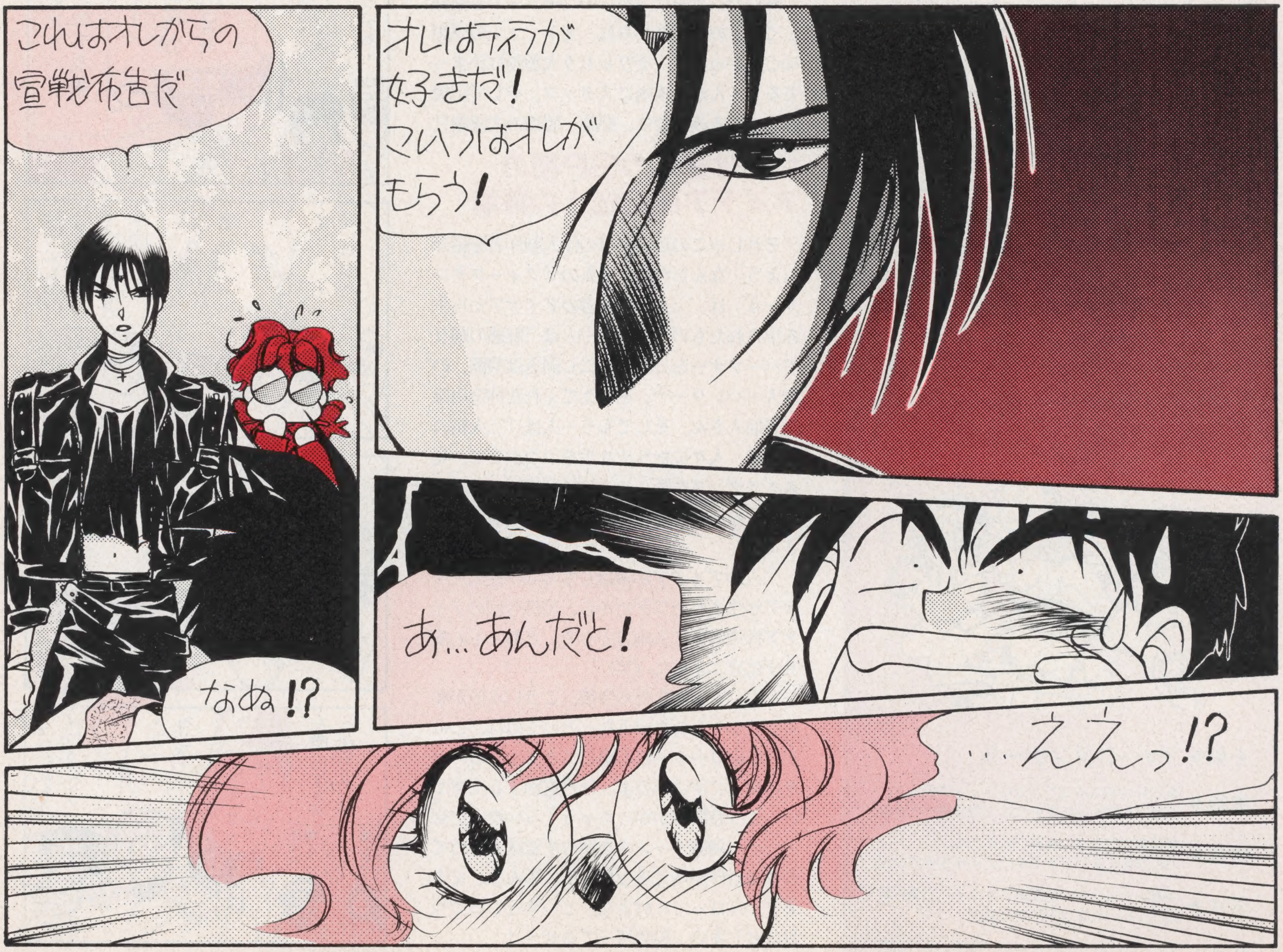
「あ、あんだと！」

真剣なエンゼルの口調にキャロットは口をあんぐりと開けた。

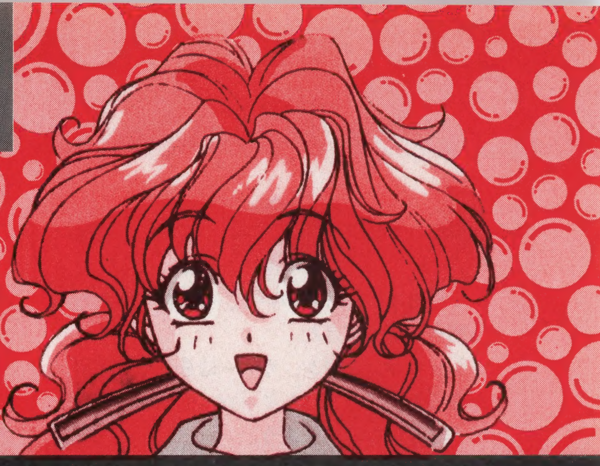
「……ええっ!?」

思わぬ宣言に、ティラは顔を真っ赤にして立ち尽くしていた。

≪続く≫



月刊 電撃爆



ついに始まった爆れつハンターTVアニメ!! みんな毎週見てるよな。やっぱ自分の原作タイトルが、アニメでオンエアされるってのは、スッゲー感動だぜ。この「爆れつSP」も、負けずにいくからよろしくな!!

アニメへの感想や意見もどんどんハガキで送ってね

元気にしてっか〜!! あっかほりどぅぇ〜すっ!! いや〜今月もきてしまったなー、このページの時間が。またまた下品…いや元気にいくから、みんな息切れせずに最後までついてこいよ!

さて、今月最初の話題はなんといってもアニメのオンエア。なあなあ、みんな毎週ちゃんと見てるだろうな。各社のしめ切りに追われるこのオレだって、編集の目をかいくぐって見ているんだから、少なくてもこのページの読者は毎週見てくれよな。

そして一言でも二言でも、言いたいことができたら、このページにどんどんハガキを送ってくれ。もちろん届くハガキはすべて目を通しているし、やっぱみんなの意見や応援がオレたち創り手の活力源なのだよ。

届いたハガキは当然このコーナーでも紹介していくのでお楽しみに。え? オレの感想はどうかって? そりゃもう大感動に決まってるじゃんか。本当にスタッフ、そして応援してくれるみんなに、感謝、感謝の大感謝!!

今月は爆れつSP初のアイデア融合怪人の登場

それじゃこの辺で今月の怪人制作者を紹介しよう。なんと今月の怪人の「フォークダンサー5」は、二人の投稿者のアイデアから生み出されたものなのだ。一人は「魅惑の踊りでパーソナーをピロピロにし弱点は演歌、の怪人・パレリーナ」を考えてくれた神奈川県月下仙人さん。そしてもう一人は「三人組の兄弟で、人々にむりやり手をつながせて、死ぬまでダンスを踊らせる輪舞魔術師・ムイマ兄弟」を考えてくれた和歌山県の三樹あづみさんだ。

二人のアイデアが融合して今回の怪人アイデアが生まれたワケだから、当然今回のアイデア採用者は二人両方となる。どちらも心配せずに喜ぶよーに(笑)。

でも、もしかしたら今後、こういう形が多くなるかもしれないよな。というのは、とにかくこのコーナーに応募してきてくれるハガキの量ってすごいのよ。毎月選別するだけでけっこう時間がかかっちゃうくらいなんだぜ。

だから掲載チャンスを増やす意味も含めて、今後は合作が増えると思うぞ。みんな、ますますがんばってくれよな。というところで今月はおしまい。投稿待ってるぜ〜!!



- **名前▶** フォークダンサー5
- **魔術▶** 奏でる音楽によって人々をフォークダンスに引き込み疲れて命を失うまで踊り続けさせる。
- **特技▶** 無遠慮な発言で人を怒らせること。都合が悪くなるとすぐ逃げ出す責任感のなさ。
- **弱点▶** 演歌。ただひたすら演歌がキライ。万国共通の子どもの弱点(?)である。
- **制作▶** 神奈川県の月下仙人さんと、和歌山県の三樹あづみさんによる合作。



4コマ 奥谷かひろ

メール オブ 爆

今月はさっそくTVアニメのネタが投稿されてるぞ。やっぱテレビはインパクトあるよな。テレビ用の新コスチュームのイラストも見たいし、今後も投稿が増えていきそうだけど、「爆れつSP」オリジナルのキャラも忘れないで応援してくれよな。



▲大阪府・鬼龍韻覇瑠華さん　それにしてもすごいペンネームだねえ。



▶京都府・キャロと呼ばれる女の子さん　何でキャロと呼ばれてるの？



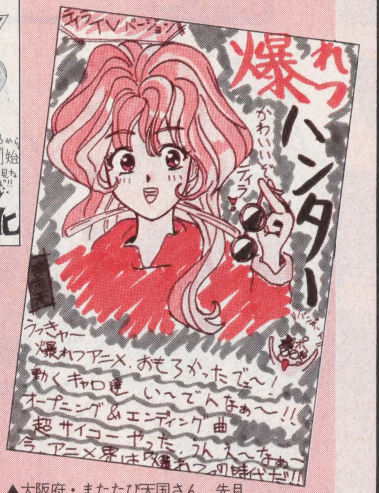
▶神奈川県・ティラ＝ティララさん　オンエアどうだったかな？



▶東京都・燐さん　オープニングはたくさんの人が気に入ってくれたみたいだね。



▶神奈川県・畑山陽子さん　はいその通り、ヤキモチです（笑）。



▲大阪府・またたび天国さん　先月号では名前を間違えてスマン。



2誌連合企画

新創設!!
爆れつ三大賞

TVアニメや連載のコミック・小説を楽しむだけでは、おもしろくない！ってキミ、お待たせしました。よりいっそう読者の参加性を増した企画、「爆れつ三大賞」のスタートです！　下の記事をじっくり読んで爆れつに参加しよう。



◀もしかしたらラジオやテレビ、そして声優デビューへのステップになるかもよ。

爆れつしてさえいれば、何でもあり!?

読者参加ゲームノベルとして始まった、この「爆れつハンターSPECIAL」向きの企画がスタートしたぞ。その名も「爆れつ三大賞」。読んで字のごとく、爆れつに絡む3つの懸賞企画だ。さっそく三大賞それぞれを紹介すると、

①「爆れつ4コマ大賞」
②「爆れつコスプレ大賞」
③「爆れつボイス大賞」

の3つがそれ。

まず、最初の「爆れつ4コマ大賞」から説明すると、そのものズバリ、爆れつのキャラクターを使った4コママンガを募集するものだ。B4サイズの画用紙かケント紙に黒インクか墨汁で描き、4本以上を1セットとして右下の住所あてに応募しよう。

次に「爆れつコスプレ大賞」コレまたそのまんま（笑）。爆れつキャラのコスプレを募集するものだ。



▲もちろんテレビアニメのキャラもOK。つまり爆れつと名の付くものであれば、何でもありってことだね。

作家志望も声優志望もみ～んな寄っといで!!

「爆れつコスプレ大賞」への応募は、コスプレした自分の写真をカラーで3カット（正面、横、後ろ姿）撮影し、自分の住所・氏名・年齢とキャラ名を写真の裏側に油性のペンで書き、各賞と同じ住所に封書で送ること。本人の応募でない場合は、必ず本人の捺印された同意書を同封する。

そして最後の「爆れつボイス大賞」は、発売中の「爆れつハンターCD」シリーズの中から好きな曲を選び、それを歌ってカセットテープに録音し応募するものだ。

各賞ともしめ切りは'96年2月28日（当日消印有効）。しめ切りまでの間に1度この電撃PCエンジン誌上と、兄弟誌電撃コミックガオ！誌上で応募状況を途中発表し、最終結果は4月発売の両誌で発表するぞ。

審査方法、賞品等については来月号で再び発表をするので、それをじっくり読んで、楽しく力の入った作品を応募してほしい。

爆れつ三大賞のオキテ

各賞のあて先は、〒101 東京都　千代田区神田駿河台1－8　東京YWCA会館　㈱メディアワークス「爆れつ○○大賞」係（○○の所に各賞のタイトルを入れて応募してください）。しめ切りは2月28日（当日消印有効）、発表は4月発売の電撃PCエンジン及び電撃コミックガオ！で行います。なお、受賞されました作品の著作権（出版権、映像化権、その他副次商品化権を含む）は、株式会社メディアワークスに帰属します。